

み手が紡ぎ出すことを可能にした。本書は「引く」事典であることは言を俟たないが、「読む」事典としての楽しみも有している。読む書として、工具書として必携の書である。
(田村加代子)

●語 学

はじめに

学界展望（語学）は、日本中国語学会・学界展望編集委員会（委員長・下地早智子）が担当する。原則として 2024 年 1 月から 12 月までに日本国内で公刊された著書および学術論文を対象とするとともに、重要な研究成果については海外で公刊された成果にも言及する。

研究分野の分類および執筆者は以下の通りである。

音韻：	更科慎一（山口大学）
文字・訓詁：	宮島和也（成蹊大学）
文法・語彙（上中古）：	楊安娜（北海学園大学）
文法・語彙（近代）：	永井崇弘（福井大学）
文法・語彙（現代）：	前田真砂美（奈良女子大学）
方言：	鈴木史己（南山大学）
教育：	小川典子（愛知大学）

「はじめに」及び全体の調整は下地早智子（神戸市外国語大学）が担当した。

文中で用いた学術誌の略号は以下の通り。いずれも 2024 年に出版されたものである。

『中』	『中国語学』 271 号（日本中国語学会）
『中教』	『中国語教育』 第 22 号（中国語教育学会）
『中研』	『中国語研究』 第 66 号（白帝社）
『現代』	『現代中国語研究』 第 26 期（朝日出版社）
『漢教』	『漢語与漢語教学研究』 第 15 号（桜美林大学孔子学院）
『音』	『音声研究』 第 28 卷（日本音声学会）
『シ』	『シナ＝チベット系諸言語の文法現象 6：類型論と史的变化』（野原 将揮・池田巧編、京都大学文学部文科学研究所）
『雲』	『雲漢』 第 2 号（京大中国語学研究会）

一、音韻

単行本では、鈴木博之・遠藤光暁編『中国語言歴史地理研究』第一集（日本地理言語学会）を挙げる。本書は漢語音韻の分野に限定されたものではないが、遠藤氏を代表者とする科研費プロジェクトの一環として開催されたシンポジウムの成果をまとめたものである。本書では漢語の数詞「一」から「十」までの語形を取り上げ、それぞれの言語地図（稿）と、上古音・中古音・近代音にわたる語形の変遷に関する論考を収めている。

このほか、シンポジウムでの発表に基づく論文が多数収録されており、その一々をここでは紹介しないが、その中には漢語音韻の領域の論文も多い。

以下、論文についていくつか概観したい。

まず、日本言語学会の学会誌『言語研究』165号に掲載され、当該学会の2024年論文賞を受賞した二篇の論文について言及する。一つは濱田武志「『文海』の「偽平声」から見る西夏語音韻学の複層性：西夏文字の字音推定の限界の所在について」である。本論文は、西夏語の韻書である『文海』において、平声巻に収録されながら「上声」を意味する記載がある字（偽平声）を糸口として、同書内の字音の表示において「分韻の論理」と「反切の論理」が矛盾する場合がある実態を示し、また今一つの韻書『同音』における新旧二系統の分韻方法の違いに言及して、西夏語音韻学が学史的な複層性を持つ可能性を示すと同時に、西夏語の音韻体系の精密な復元に当たって、西夏語音韻学の思考法を探究する必要があることを指摘している。漢語音韻学の諸資料に対する学史的理解にも興味深い示唆を与える議論であると言えよう。もう一つは、大竹昌巳「契丹語の音調」である。論文ではまず、一種の表音文字である契丹小字で漢語音を表記した資料に見られる特殊な表記の出現への定量的分析によって、漢語側の三つの異なる調類群を析出し、これと中古音の声母類の枠組みを照らし合わせることによって、平声・上声・入声が陰陽に分裂しており、うち入声については次濁と全濁も分裂していることを示した。次に、契丹語を漢字音写した資料からは、契丹語形の語頭で陽調字、語末で陰調字が用いられる傾向が見出され、この傾向を現代モンゴル諸語の句音調 phrasal tone と照らし合わせて、契丹語の音調もまた phrasal tone をもつ言語で、「右端を H で示すタイプ」であったと推測した。以上の推測は、契丹語の音調だけでなく、遼代漢語の声調調類・調値の復元問題にも議論の材料を提供し得る。

吉池孝一・中村雅之「重紐をめぐる幾つかの問題 (1)～(8)」(『KOTONOA』254号～261号)及び「重唇音の軽唇音化について (1)～(3)」(『KOTONOA』262号～263号)は、両氏の対談の形式をとりつつ、中古期の音韻史の重要問題である重紐及び軽唇音化に関する日中両国の研究を詳細かつ丹念に跡付けつつ、その論点を整理したものであり、反切をはじめとする音韻資料の扱い方や音韻論的解釈に関する多くの問題が論じられている。

太田斎「『韻鏡』「開合」臆解」、「同（補）」、「同（追補）」(『KOTONOA』255号～257号)は、『韻鏡』の現存諸テキストの転図に記載された「開」、「合」、「開合」の解釈に関する論考である。

反切に対する縦断的研究として、季鈞菲「中古止攝重紐韻唇音字演變特徵初探」(*Kwansei Gakuin University Humanities Review*, 28)が発表された。本論文は日本中国語学会第72回全国大会(2022年11月6日、富山大学)における発表内容を論文としてまとめたものである。『蒙古字韻』や『古今韻会举要』において重紐A、B類の別が異例の開合対立を示しているように見える中古止摂唇音字について、6世紀『玉篇』から11世紀『集韻』までの8種の反切資料962例を対象とし、反切下字に唇音字が使われている比率と上字において三等韻/非三等韻が使われている比率を調べており、重

紐B類の被切字の合口性はA類よりも強く、また後の時代になるほどB類被切字の唇音性が強まると結論している。

鳥羽加寿也「錢大昕の音韻学について」(和歌山大学教育機構教養教育部門『教養教育研究』1)は、錢大昕の音韻学説に焦点を当てて分析を行っている。錢大昕が顧炎武の古音説を批判する中で用いた「正音」「転音」の概念、錢大昕の六朝以降の音韻学への評価、錢大昕音韻学のその後の展開など、清代音韻学の中での錢大昕の学説の特質を論じ、その音韻学が儒学における尊古の原則に奉仕するものであると結論している。

橋本貴子「『翻梵語』と『玄応音義』」(『雲』)は、仏教文献からのアプローチである。論文では、中国梁代頃の成立と推定されている梵語辞書『翻梵語』について、その原文と日本編纂のいくつかの悉曇学書中の引用箇所との比較を通じ、『翻梵語』を継承しつつ一部を置き換えた「『翻梵語』系辞書」の存在を推測する。その上で、『玄応音義』を調査し、『翻梵語』系辞書から、音訳語を引用していると推測できる多数の用例を見いだしている。唐代音韻史の最も重要な資料の一つである『玄応音義』の性質や編纂過程の一端を明らかにする綿密な研究である。(更科慎一)

二、文字・訓詁

書籍についてはまず、松丸道雄『殷周史甲骨金文研究』(大修館書店)を挙げる。本書は松丸氏がこれまで発表してきた論考のうち、主要なものをまとめたものである(「殷墟」とは何か一統「殷人の觀念世界」のみ書き下ろし)。その中で、「II甲骨文とその周辺」「III金文と青銅器」「IV文字と書道」に収められた論考は、甲骨文・金文を中心とした古文字に関する研究に直接関係するものであり、今後の研究を行なっていく上で改めて参照すべきものであると言える。これまで、氏の論考をまとめて読むことのできる書籍としては、甲骨文に関する論文を中心として集めた『甲骨文の話』(大修館書店、2017年)が刊行されている(本書と一部重複)。本書によって、甲骨文に限らずの松丸氏のこれまでの研究のエッセンスを多くの読者が通覧できるようになったことは大変意義深い。

論文では、白石將人「『説文解字』解釋における段玉裁の複舉字説と錢大昕の連讀説」、孫楊洋「『諧聲品字箋』に與えられた翼—「正音」字書として讀まれた歴史—」(以上『日本中國學會報』76)、大居司「字彙の部首引き・檢字法の“以前”と“周圍”—新出資料《五音類聚篇徑指目錄》等を含めた大きな補足—」、田中郁也「真空『篇韻貫珠集』の部首検索法—附論:『字彙』『正字通』の部首検索の工夫—」(以上『日本漢字學會報』6)等、本年は字書に関する論考が多数発表されたことが注目される。その中で例えば白石氏の論考は、まず顧炎武・朱筠・孫星衍ら清儒の言説を基に、清初には低かった『説文解字』の評価が、乾隆・嘉慶期に至って高まったことを述べる。その上で、小篆で書かれた親字と説解とを続けて読むべきという錢大昕らによる説(「連讀説」と、親字の直後に隸書で親字がもう一度書かれていたはずであるという段玉裁による説(「複舉字説」)を対照させる。そして両者ともに前提として『説文解字』に權威を認め、その上で『説文解字』の矛盾や不可解な点を「誤り」として片付けるのではなく、何ら

かの説明を行うために唱えられた説であること、また段玉裁の「複拳字説」は、『説文解字』の小篆は字形を説明するものであり、説解は字義を説明するものであるという、段氏独自の理解に基づくものであったと指摘する。

また大西克也「熊野の牛玉宝印と中国の鳥書」(『東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要 文化交流研究』37)は、春秋時代の呉越における鳥虫書から、日本の熊野の牛玉宝印(魔除けの護符)に至るまでの壮大な時空間を対象とした、漢字とそれに密接に付随する信仰・宗教性を扱った論考であり、漢字およびその日本への伝来を信仰とともに捉えるという、極めて重要かつ興味深い視点を提供している。本論文では、中国の呉越の地に由来する剣や鏡に対する信仰を背景に、装飾的ないわゆる雑体書と吉祥思想とが結びつき、また記録という本質的機能から派生し、「魔除け」という宗教的機能を漢字が有することとなったことを指摘する。そしてこうした思想は道教・仏教(密教)に取り入れられ、様々な雑体書とともに日本にもたらされた。その宗教性から雑体書は扁額に用いられる書体となり、その後、護符として強い霊力を持たせることを企図して牛玉宝印にも用いられるようになったという。

この他、『漢字学研究』12には例年通り古文字に関する論考・解説が多数収録されている。例えば「金文通解」として西周から春秋時代にかけての金文の訳注5編を、「古文字学研究文献提要」として中国語論文の解説4編を掲載し、また横大路綾子「二〇二二年古文字学論著目」は当該年度に日本語・中国語で刊行された古文字学に関する単著・雑誌をリストアップしており、研究動向を把握する上で有用である。

また、柿沼陽平編訳『岳麓書院藏秦簡「為獄等状四種」訳注(上)(下) 裁判記録からみる戦国末期の秦』(平凡社)、小寺敦「清華簡『天下之道』譯注」「清華簡『虞夏殷周之治』譯注」(『東洋文化研究所紀要』184、185)、戸内俊介・野原将揮・海老根量介・宮島和也・宮内駿「安徽大學藏戰國竹簡(二)《仲尼曰》譯注(1)」(『雲』)など、今年度も秦簡・楚簡を中心とする新出土簡牘資料の解説・検討の成果としての訳注が引き続き活発に発表されている。

(宮島和也)

三、文法・語彙(上中古)

2024年における上中古中国語の語彙および文法に関する研究は、成果の数が多かったのみならず、既に一定の蓄積がある諸問題について、意味論、語用論、機能文法、生成文法といった理論的枠組みに基づくアプローチを行い、独自の視点と結論を提示するものが多くみられた点に特色があったと考える。

まず、松江崇「談汉语第三人称代词‘他’的生成机制」(『清华语言学』)を取り上げたい。本論文は、戦国時代から唐五代にかけての九種の文献を資料として、「他」の指示機能の変遷に着目しつつ、第三人称代詞の生成メカニズムと変化過程を語用論的視点から考察している。具体的には、第一段階では、「他」は「参照事物X以外のもの」という語彙の意味を有していたが、戦国から魏晉南北朝にかけて意味の漂白化を経て、指示対象に対する「排除的・対立的心理を表す」語用論の意味へと変化し、第二段階の魏晉南北朝期では、この「排除的・対立的心理を表す」という語用論の動機により「他」

の使用頻度が増加し、さらなる意味の漂白が促進されたという。そして第三段階では、「他」は「排除的・対立的心理を表す」意味を失い、定的（definite）な指示性を備えた用法が発達し、無標の三人称代詞へと接近していったとする。本論文は、上古から近古にわたる広範な時代の用例を分析対象としており、「他」の文法化過程が、語用論的動機によって促進された意味変化と使用頻度との相互作用の中で進行していった複合的な現象であることを精緻に論証しており、指示詞の文法化研究という点においても高い学術的意義を有する。氏のもう一つの論文「浅談漢代東部、北部方言の動態変化」（『シ』）は、揚雄『方言』を資料として、前漢期の東部・北部方言と他地域の方言との親疎関係と史的变化とを「語彙一致率」に基づいて分析したものである。東齊・海岱方言は、隣接する魯・宋方言よりも秦・晋方言との近似性が高いこと、東齊・海岱方言と北燕方言、朝鮮方言の三者に関して北燕方言は他の二者のいずれとも近いが東齊・海岱方言と朝鮮方言との直接的な近似度は高くないことなどを指摘している。その上で、これらの地域の歴史的変遷を推定し、併せて「北燕」「朝鮮」方言には非単音節語が多いこと、さらに従前の研究において同一方言区と主張されることもあった「東齊」と「齊」との関係については、明確に異なる方言であると主張している。

市原靖久「上古中国語「夫」再考—発語の辞をめぐる」（『中』）は、上古中国語における「夫」の指示詞用法と発語の辞用法との関係について重点的に分析を加え、「夫」が談話標識として用いられる際の文法的・意味的・語用論的機能について考察したものである。氏は「夫」が指示詞から話し手の主観的態度を示す談話的機能へと変化したという従来の見解に概ね同意しつつも、その過程を文法化とみなして「定冠詞」という中間段階が存在したとする説には同意していない。「夫」は、記憶指示を含む遠称指示の用法から、文脈に基づく語用論的な主観化・間主観化を経て、次第に前提の提示・主題や議論の転換といった意味・機能を獲得し、談話標識へと発展したと主張する。そしてこのような機能変化は、実質語から機能語への文法化とは異なる、語用論的機能の拡張であるとしている。本研究における用例の分析手法、とりわけ複文や段落、より大きな言語単位の談話構造に基づく語用論的分析の方法は、関連分野の研究者にとって、示唆に富むものと言えよう。

三村一貴「上古漢語における「或」の機能と表現特徴」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』27）は、上古漢語における「或」について、量子子とモダリティ副詞という二つの機能に着目しつつ考察したものである。「或」が現れる構文や文脈の特徴を明らかにし、モダリティ副詞としての用法が非断定的な文脈に限定される一方で、条件節における「或」は量子子として理解されるべきであると指摘している。結論として、両機能の根底には「不定性」があると主張し、「或」の多義性を解釈するための新たな観点を提示している。当該論文は、「或」の文法化過程の解明に寄与するのみならず、上古漢語におけるモダリティ体系の実態を明らかにするうえでも重要な貢献を果たすものと言えよう。

楊濬豪「《詩經・秦風・權輿》首句的語法問題探究」（『雲』）は、生成文法の枠組みに基づきつつ、伝世本および安大簡本における「權輿」首句の「於」の品詞と「夏屋」の

意味解釈について分析している。そして両版本における「権輿」首句が同一の深層構造を有しており、いずれも焦点化による要素の移動が生じたのであるが、伝世本のみ焦点標識が付されたことなどによって表層構造における差異が生じたと主張している。本論文は、異なる版本における「権輿」首句の相違を統一的に説明するための興味深い観点を提供している。

(楊安娜)

四、文法・語彙（近代）

2024 年は中国近世語学会機関誌『中国研究』のみならず、沈国威関西大学教授退休記念号（『関西大学中国文学会紀要』第 45 号）や『文明 21』第 52 号（愛知大学国際コミュニケーション学会）の「特集：近代西洋人キリスト教宣教師の中国語学習と漢訳」により、文法・語彙の研究にとってより実り多き年となった。ここでは 2024 年の傾向と言える（1）教科書や会話書などの中国語学習教材を用いた研究、（2）北京語または北京官話に関する研究、（3）近代語彙の成立に関する研究、から研究成果を紹介することで概括したい。

まず（1）について、本土資料による研究として今村圭「从使役动词的使用看清末民国时期汉语会话课本和《小额》之间的语料性质差异」（『中研』）がある。ここでは『小额』と清末民国期の各種中国語会話教科書に見える使役動詞の機能を「指示使役」「許容使役」「誘発使役」の 3 つに分けて比較考察を行い、『小额』の北京語が清末民国期の会話教科書に比して口語化の程度が高いと述べる。また、日本資料による研究として、石崎博志「『婦女談論新集』からみる近代中国語の女ことば」（『関西大学中国文学会紀要』第 45 号）がある。ここではジェンダーの観点からポライトネスに注目し、日本人女性を対象とした『婦女談論新集』をはじめとする中国語教材に見える女性ことばの特徴が示されている。「二人称代名詞（你／您）」「量詞（位／個）」「文語（尊敬や謙譲を示す接頭辞など）」「依頼表現（依頼的／命令的）」の使用状況を男性話者のみの『北京官話談論新編』と比較することで、女性ことばの特徴が丁寧さに加え、上品さにあることも指摘する。さらに朝鮮資料による研究として、楊斐斐「《老乞大》四种版本中“意愿”类助动词的语义场考察—以“索、待、要、须”为例」（『中研』）がある。『老乞大』の四種の版本に見える助動詞「索」「待」「要」「須」が同義の意味範囲にあることから出発し、「索」が『旧本老乞大』のみに、「待」は『旧本老乞大』と『翻訳老乞大』のみに見られることを指摘する。この原因について、『旧本老乞大』期では「索」「待」「要」「須」が同一あるいは近似の語義であったため四者すべてが使用されたが、『翻訳老乞大』期になると「索」が完全消失し、『老乞大新釈』『重刊老乞大』期では更なる口語化により、「要」「須」の語義が拡大して「待」を消失させたと述べる。

次に（2）で本土資料による研究には、山田忠司「“樂得”小考—北京語資料を対象として」（『中研』）がある。この論文は北京語資料に常見される①形容詞「樂」+ 様態補語標識「得」及び②動詞「樂得（lèdé）」について、『紅樓夢』『兒女英雄伝』『小额』、老舍作品の用例を考察したものである。これにより、「樂得」は①と②を分けない一語二義であるが、老舍は②を副詞ととらえたために、「樂得」に副詞接尾辞「的」を付加

したと指摘するとともに、②は①の派生であるとする。また西洋資料による塩山正純『天路歷程』官話版にみる十九世紀後半から二十世紀初頭の官話の一端』（『文明 21』第 52 号）は、W. C. バーンズが漢訳した『天路歷程』を用いて 19 世紀後半から 20 世紀初めの官話の特徴を解明したものである。この論文により文言版の語彙が官話版では口語の多音節語となっていること、多くのアール化語を有すること、限定された人称代名詞（我／我們、你／你們、他／他們）と接続詞（和）の使用を指摘し、これらはバーンズの北京での中国語学習に起因すると指摘する。さらに（2）に関連する満漢合璧資料として特筆したいのは、竹越孝、斯欽巴図『『一百条』系諸本総合対照テキスト』IV（好文出版）である。同書は清代の満洲語会話書『一百条』と同内容の諸本を一句ごとに対照させたテキストで、2020 年 2 月から出版されてきたが、2024 年で全四巻が完結した。同書に含まれる中国語は清代北京語の実相を反映した一級の資料と言える。

最後に（3）の研究として、田野村忠温「「卡车」の語史—その起源と展開」（『或問』第 46 号）がある。現代中国語でも使用される「卡车」の語史を第一期（1900～1907 年頃）、第二期（1908～1922 年頃）、第三期（1923 年頃～）の三期に分け、各期での「卡车」の語義を解明する。第一期の「卡车」が馬車を示すとともに「卡」が「cart」の音訳であること、第二期では「卡」が「freight car」や「passenger car」を示し、「卡车」が鉄道における被牽引車両を指すこと、第三期では「卡车」に自動車を示す名称として新しい意味が追加され、最終的には専ら貨物自動車を表す名称として定着したと指摘する。

近代中国語資料はいまだ未発掘のものが多く、その発掘は継続している。既存の資料や知見に新発掘資料とその知見が加わることで研究がより活性化し、近代の文法・語彙の全容解明に向けて一歩でも前進することを期待したい。（永井崇弘）

五、文法・語彙（現代）

“是”に関する著作が 2 冊刊行された。中田聡美『現代中国語における“是”とモダリティ』（大阪大学出版会）は、動詞、形容詞前の“是”（“是+VP/AP”における“是”）を能願動詞とみなす。副詞にはみられない“是不是+VP/AP”の反復疑問文を形成すること、“常常是”のように非モーダルな二音節副詞の後に置かれることが理由に挙げられる。そのうえで、日本語学におけるモダリティ研究の成果を取り入れた分析により、“是+VP/AP”における“是”は現実モダリティに属し、非現実モダリティに属する能願動詞“会”、“要”と対立関係をなすものと主張する。王亚新『现代汉语“是”字句研究』（白帝社）は“是”の後ろが名詞性のもの（“是”文）を中心に、その派生構文として“是……的”も扱う。このうち、已然の事態について述べるいわゆる“是……的”構文については、“是”文の識別表示機能（“表示识别的功能”）を引き継ぎつつ“VP 的”が指称義を残しているために、施事指向の“VO 的”と受事指向の“V 的 O”の二つの構造を形成できるとする。

社会言語学的研究として、河崎みゆき『中国語の役割語研究』（ひつじ書房）を取り上げる。同著者による『汉语“角色语言”研究』（北京、商務印書館、2017 年）をもと

にした日本語版。社会的立場や他者との関係性においてどのように話すべきかという規範の観点に立つ中国の研究に対し、本書は日本語研究における「役割語」という新しい概念、研究手法を取り入れた分析で、中国語の役割語の実際のありようを明らかにする。テーマは異なるものの、河崎氏の論考は中田氏の“是”の論考と同様に、日本において継承され発展してきた研究の枠組みを取り入れたものである。国語学や日本語学の知見を中国語研究に応用する試みには、今後更なる展開が期待される。

“語体”（文体）の研究として、石崎博志『現代中国語の文語』（関西大学出版部）を取り上げる。法律、食品表示、医薬品、告知文や公文書などに用いられる典型的な文語表現のほか、就職活動の面接における口頭での文語表現の使用についてもその特徴を分析している。伝達手段が口頭か書面か、スタイルとして口語的か文語的かという二種の区別に基づいた考察は、“語体”研究を一步進めるものであるといえる。“語体”に関わるものとしてこのほかに、長谷川賢「現代中国語書面語正式体における接続詞“虽”と“虽然”の相違—“語体语法”（語体文法）の観点から—」（『現代』）が、“虽然”よりも「莊典度」の高い“虽”は、具体的な出来事から一般化された恒常の状態や属性といった背景情報を示し、あるひとつの対象を描写するために用いられると結論付ける。

日中対照のアプローチをとる論考も多くみられた。まず、論集が2冊刊行されている。1冊は日中対照言語学会編『日本語と中国語のやりもらい表現』（白帝社）。収録論文のうち、戦慶勝「中国語の授受表現のあり方と日本語訳について」、譚昕「やりもらい表現に関する一考察—中国語との比較—」は人称に着目する。「てやる」「てくれる」「てもらう」のような文末のやりもらい表現には、利益のうけ手やあたえ手にあたる人称代名詞の省略や制限がかかわっており、このような文末表現をもたない中国語との対比が浮き彫りとなる。また、古賀悠太郎「授与動詞文に関する日中対照研究—構文の意味拡張という観点から—」が、益岡隆志氏の「構文の意味拡張」を手がかりとして日本語授与動詞文の意味拡張の段階と“給-人-N”、“V-給-人”、“給-人-V”との対応関係を示すなど、やりもらい表現に関する日本語学の豊富な研究成果を踏まえた議論もみられる。もう1冊は、彭飛企画・編集『日中対照言語学研究論文集—中国語から見た日本語の特徴、日本語から見た中国語の特徴—』第二巻（和泉書院）。紙幅の都合により多くは挙げられないが、古川裕「現代中国語における〈変化〉事象の捉えかたと構文特徴—〈断続的变化〉と〈連続的变化〉—」は“換”と“変”の考察を通して中国語における〈変化〉事象の捉え方の違いを論じ、丸尾誠「中国語の動補構造“V 清楚”の用法について—行為の意図・目的・結果との関連において—」は、Vが「答えを求める」という意図・目的を含意する場合、“清楚”には動補構造にもとづいた「（Vした結果）分かる」という因果関係の読みがもたらされることを述べている。“換”、“変”がどちらも「かえる／かわる」に対応することや、“（帳簿を）対清楚”の“清楚”が日本語の「はつきり」とは馴染まないといった日本語との対照を背景にしつつも、語彙レベルの比較対照にとどまらず、より大きな視点で中国語の特徴を捉えようとする点が注目される。

また、日中対照研究の単著も刊行された。薛鳴『「関係」の呼称の言語学—日中対照研究からのアプローチ』（ひつじ書房）は「関係性」の観点から呼称語を考察したもの

で、なかでも“們”については、名詞が関係を示す語か否かに加え、その「関係性」が「世間」と「世界」のいずれに属するかという視点で分析を行なう。麻子軒『無生物主語他動詞文の日中対照研究—大規模均衡コーパスと多変量解析を用いた新たなアプローチ』（関西大学出版部）は、無生物主語他動詞文の成立要因として、文レベルでは動詞の再帰性、受影性、内面性、具体性を、文章レベルでは「文脈展開機能によるもの」と「表現効果によるもの」の二つを挙げる。

語彙研究では、盧濤『中日対照 中国語の語彙化研究—文化的概念の形成をめぐって』（丸善出版）が、“朋友”、“合同”、“交渉”、“面子”、“文化”の語彙化の過程をたどり、現代語の“朋友”の意味の希薄化や、“合同”の述語から名詞への語彙化、「関係、付き合い」を意味する“交渉1”から「ネゴシエーション」を意味する“交渉2”への更なる語彙化などについて、そのプロセスを考察している。

構文研究では、王艺嫻「疑問詞連鎖句 WH 要素同指关系及与 Wh₁-D 句互换条件分析」（目次では「疑問詞連鎖句中 WH 要素の照応关系再考」）（『中国語文法研究』2024 年巻）が、疑問詞連鎖構文において前後で照応する疑問詞間には、指示対象が完全に一致する狭義の同一指示関係と、「集合的同一指示」、「認知的同一指示」という広義の同一指示関係とがあることを指摘し、後節に指示代詞を用いた Wh₁-D 文（“谁跑我崩了他！”など）は狭義の同一指示関係においてのみ成立すると述べる。

最後に、文レベルでは意味的・機能的差異を見出しにくい二種の語や形式について、談話レベルに視野を広げて考察したものを取り上げる。張麗群・楊凱榮「也談“一些”和“一点儿”的语义功能差异」（『現代』）は、不定量を表す“一些”には部分量を表す意味機能もあり、これは主観的小量を表す“一点儿”では代替できないとする。郭嘉璋「可能補語“V得/不C”のモダリティ機能」（『現代』）は、動補構造“VC”が“洗破了”のような「非理想的な結果の実現」、「挖浅了」のような「予期した結果とのずれ」を表す場合には“V得/不C”が成立しにくいという従来の指摘に対し、このようなタイプの“V得/不C”の実例を挙げ、発話背景に VC という前提が存在すれば認識的モダリティの意味として“V得/不C”が成立することを示している。（前田真砂美）

六、方言

音声・音韻に関連する研究が多く見られた。音響音声学的研究では、高橋康徳「上海語の疑問イントネーションに関する予備的考察」（『音』）は上海語の陳述文と疑問文のペアデータを分析した結果、文末部のピッチ曲線及びピッチ差に有意な差が見られず、先行研究によるバウンダリートーンの解釈は支持されないこと、声調音域の解釈の適用可否は現段階では判断が難しいことを指摘する。大西博子「北部呉語における入声の音高と音長関係—上海、金沙、四甲を例に—」（*Ignis*, 4）は3地点の単字調と双字調における入声と舒声の音高と音長を分析することで、北部呉語の入声舒声化は陽入が陰入より先行していると考察する。また、松江崇・池田巧編『シナ=チベット系諸言語の文法現象7：音声と語彙の記述分析』（京都大学人文科学研究所、2024 年）には、呉語の有声声母を音響音声学的に分析した王丹露「呉語の「清音濁流」の音声学的特徴につい

て」のほか、漢語方言の音韻を扱った論文が3篇収録される。

形態論では、Shin-ichi Tanaka et al. “The Variation, Change, and Opacity of Tone Neutralization in Cantonese: Its ‘Unity in Variety’ and Implications for Tonal Representations” (『音』) が広東語の「変音」(形態音韻論的な調値の変化)の共時的変異と通時的变化について、最適性理論 (Optimality Theory) による統一モデルで説明する。陳凱僑「語構造の観点から見た広東語フットの考察」(『アジア・アフリカ言語文化研究』107) は韻律形態論の観点から普通話と広東語のフット構造を比較し、普通話は音節フットであるのに対し、広東語はモーラフットを有すると主張する。

方言文法では、黄沉默「闽东方言泰顺蛮讲的否定词」(『シ』) は浙江省泰順県で使われる蛮講における否定表現の用法を整理する。藤原優美「成都方言における“倒 [tau⁵³]”の意味・用法について」(『広島国際研究』30) は成都方言の“倒”について、普通話と対照させながら動詞・補語・助詞に分けて意味・用法をまとめている。

方言史では、沈瑞清・盛益民「内陸闽语非南朝吴语直系后代说」(『シ』) は南朝呉語、現代の呉語・閩語の代名詞を比較し、現代の内陸閩語 (閩北・閩中方言、邵将方言) は南朝呉語の改新的特徴をもたないことから、その直系の後裔とは見なせないとする。

音韻史については、濱田武志「漢語系諸語の南方変種にみられる莊母・章母の不規則的・個別的な鼻音化現象」(『音』) は華南には粵祖語の伝播以前に先住の漢語が存在したと仮定し、その未知の先住変種において破擦音声母の莊母・章母が破裂音化、入破音化を経て鼻音化し、その語形の一部が借用された結果、鼻音化現象が現代の粵語・桂南平話に散発的に残存しているという仮説を提唱する。

言語接触を扱った研究として、川澄哲也「現代青海方言与元代汉儿言语是否存在同源关系? : 以“呵”、“有”为线索的考察」(『言語文化論究』52) は青海方言と元代の漢児言語にみられる句末の“呵”と“有”の分析を通して、現代青海方言が漢児言語の後裔ではないこと、両者はいずれも漢語とモンゴル諸語の接触により成立したために共通点が多いと捉えられることを指摘する。

言語地理学的研究については、漢蔵語の歴史的研究と地理言語学的研究をテーマにした論文集である遠藤光暁・鈴木博之編『歴史地理言語研究』第一集 (日本地理言語学会) に多くの論考が掲載される。また、GIS (Geographical Information System) を活用した方言研究として、沈力・鄭穹穹「交流度による入声調消失の要因の探求—中国汾河流域における2種類のデータ分析—」(『地理言語学研究』4) を挙げる。地域間の接触の頻度・広がり・強度を測定する指標として「交流度」を設定し、中古入声が保存される晋中盆地と入声が消失した臨汾盆地の中間にある靈石高地では、各方言区の入声消失の状況が中心地域との交流度の違いによって説明できるとする。

社会言語学的研究として、田中智子「『権威的知識』と言語の継承—客家語の事例—」(『関西国際大学研究紀要』25) は台湾の客家語母語話者へのインタビューを通して、母語を守るための郷土言語教育で政府主導の教材や資格試験が「権威的知識」の役割を果たすことを指摘し、それによりその土地の言葉が軽視される可能性があることにも注意を向ける必要があるとする。

(鈴木史己)

七、教育

まず、これからの中国語教育のあり方について考えた論考をとり上げる。史有為「在新技术下的汉语二语教学」(『漢教』)は、欧米では手で書かずに“电写(入力)”によって中国語を学ぶ試みがあることを紹介し、日本で新技術をどのように中国語教育に取り入れるべきなのか、AIの運用も併せて考える。郭春貴「日本の大学汉语教育何去何从?—大学二外汉语教育—」(『中教』)は、第2外国語としての中国語教育の重要性を論じ、現在直面する問題として、社会的背景、大学、学生、教師に関連する問題を挙げる。その上で、社会や大学、学生の問題については教師の力はおよばないが、教師自身は必要な専門知識を身につけることで、授業の質を向上させることが可能であると述べる。

次に、鈴木慶夏・西香織「中国語教育文法の設計に必要な談話文法の視点」(『中教』)は、教育文法の構築を目標として“有”構文と“(是)……的”構文の事例をとり上げる。ここでの教育文法とは、学習対象となる文型や表現形式を具体的な場面や状況に適切に位置づけ、学習者がuserとしてコミュニケーションをとるための文法上の情報を整序することを目指しており、これらを実現させるためには、談話文法の視点が必要不可欠であることを説く。

コーパスを用いた研究からは2篇をとり上げる。柳素子「中国語コーパスに基づく複合方向補語の分析—基本的な動補(形補)フレーズの選定—」(『中教』)は、13種の複合方向補語を調査対象とし、コーパスを用いて複合方向補語の出現頻度を求め、前項動詞(形容詞)との共起頻度、共起強度(ダイス係数)を算出し、複合方向補語の共起傾向について分析した。この結果を踏まえ、高校の初級クラスに複合方向補語を導入することを目的とした基本的な動補(形補)フレーズを選定する。李佳「基于ADDIE模型的中文摘要写作课程实践—日本中文系学生毕业论文摘要写作指导的可能性与课题—」(『中教』)は、ADDIE(分析・設計・開発・実施・評価)モデルに基づき、卒業論文のための中国語要旨の作文指導を行った。教育実践では、論文要旨を集めたコーパスを構築し、学生にコーパスを活用させて、使用頻度の高い表現を分析し発表するというグループワークを行う。その結果、一定の学習効果があったことを報告し、改善すべき課題について考察する。

この他、実践研究として、吉川龍生・荻野友範・深谷圭助「高等学校での実践データに基づく中国語「辞書引き学習」導入パッケージ」(『中教』)は、高等学校での中国語教育に辞書引き学習(Lexplore)を導入し、2年間の実践の中で収集したデータをもとに、中等教育の多様な教学環境で利用可能な辞書引き学習の導入パッケージを提案する。

2024年は質的研究が多く見られた。以下、会話分析とナラティブ分析を紹介する。会話分析の手法を用いた研究として、劉礫岩「中国語会話における糸口質問連鎖の組織化に関する研究—聞くことと話すことのマネジメント—」(『中教』)では、中国語会話における糸口質問連鎖の組織化について分析し、糸口質問連鎖は、会話の参加者たちにとって共通の話題における「聞く」と「話す」の参加機会をマネジメントするものであ

ると述べる。張可蓉「汉语学习者在会话中的修复及其影响—基于日本汉语二语学习者与汉语母语者的会话分析」(『国际中文教育(中英文)』9(4))は、日本の中国語学習者が会話の中でどのように「修復(repair)」を行うのか分析した。その結果、修復の中では自己開始他者修復(self-initiated other-repair)と他者開始他者修復(other-initiated other-repair)のみが、会話の理解しやすさ(comprehensibility)と相関があった。また自己開始他者修復には、母語話者主導の「確認型」、学習者主導の「質問型」、双方による「協働修復型」の3パターンが観察され、協働修復型で母語話者が何に注意すべきかを考察した。

以下はナラティブ研究である。植村麻紀子「「わたしにとって中国語は…な言語である」—高校で中国語を学んだ学習者のライフストーリー・インタビューから—」(『複言語・多言語教育研究』12)は、約25年前に高校の中国語コースで学んだ学習者の語りから、彼らがどのような思いで中国語と向き合ってきたのか、自分の人生において中国語はどのような意味を持つと考えているのかを描き出した。そして、これらの語りを教育の場にどのように還元し、授業設計をすべきか検討した。山崎直樹・小川典子「3言語使用者を目指すわけ—台湾クロス留学を選択した学生の事例から—」(『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』20周年記念特別号)は、英語と中国語を同時に学ぶ留学プログラムに参加した学生たちの語りから、そのような留学プログラムを選択した背景、理由、動機づけ、そして「3言語使用者」となることにどのような価値を見出しているのか、専攻言語を選択するにあたって学生たちがどのような考えの下でその選択をしたのかについて分析を行なっている。(小川典子)